

※

「どなたか、アルファのお知り合いはいませんか？」

ファミレスの適度な喧騒の中、店員に案内された席に着くや否やの赤葦の問いに、向かいに座った男は数回目を瞬かせたあと、記憶を探るように宙を見上げた。

そして数秒後。

「俺」

と、自分自身を指差しながら胡散臭いとしか言いようのない笑みを赤葦に向ける。

黒尾鉄朗。黒猫を連想させる風貌と仕草をする彼は、梟谷学園グループのうちの一枚である音駒高校のバレー部主将である。木兎と同年でとても仲がいいのだが、黒尾の浮かべる笑みはいつも、裏表のない木兎の天真爛漫な笑みとは真逆の種類のそれだった。

このまま黒尾の調子に合わせていたら話の本題に辿り着くまでに苛々が募りそうだ。悪乗りする木兎と黒尾のふたりを往なすのはこの一年半でだいぶ慣れた。表情筋は一切動か

さずに赤葦が返す。

「黒尾さん以外で」

「んー……うちの部員だと、他はリエーフぐらいかな」

と、銀髪で長身のMBの名前を挙げた。バレーのプレーにはまだ初心者くささが残っているが、あの身体能力の高さは彼がアルファ性であることを如実に示している。

「バレー部員じゃないほうがありがたいです。それで、できれば後腐れのない……っていうか、何事も割り切って考えてくれるような人がいい」

そこまで聞いて、黒尾の顔から揶揄うような笑みがスッと消えた。

「理由は？」

「言わなきゃなりませんか？」

「そんな胡散臭え話に黙って自分の知り合いを関わらせると思いませんか？」

目つき同様鋭い声音で赤葦に問いかける。

黒尾の言う通りだった。ベースは誰にとってもデリケートな問題だ。それを会って挨拶もそこそこに「アルファの知り合いがいるか」などと無神経に切り出されたら、たとえその後の話など聞かずに席を立ったとしても誰にも責められない。

「すみません、いきなり変なことを言っているのは自分でもわかっています。……でも、

なるべく人に知られずにアルファバースの方の協力がいるんです」

「誰が？」

「俺です」

赤葦の切羽詰った様子に黒尾は目を瞠る。

「黒尾さん、アンダーバースって知ってますか？」

そこから始まった赤葦の話を黒尾は最後まで一度も遮ることなく聞いていたが、彼の肩間に刻まれた皺が薄れることは一瞬たりともなかった。

赤葦はアンダーバースという特殊バース性だった。

非常に稀ではあるが、アンダーバースにはバース変異という現象があること。赤葦はそのバース変異でオメガ性になったこと。バース変異に伴う体調不良、バイオリズムの乱れはアルファとの接触、有体に言えばセックスによって改善・安定するということ——。それらをまず簡単に説明した。

最善の相手はもちろん赤葦のバース変異に影響を与えた男、木兎光太郎その人であるが、そこまで告げるわけにはいかないので、黒尾にはただ、身近すぎる相手は気まずいのだと告げた。

ソレ目的のためにSNSやそういう類の掲示板などで相手を探し、まったく知らない人物と会うのも怖い。抑制剤の改良や発達により、発情期のオメガがそのフェロモンによって理性を失ったアルファに乱暴される事件は減ったものの、まったくなくなったわけではないからだ。

身近すぎず遠すぎず、の相手が必要なわけである。それで他校の、顔の広そうな黒尾を頼ったのだ。

「おまえはもともと『アンダーバース』ってやつで、最近オメガになった、ってことで合ってる？」

「はい」

「それで、えーと、そのバース変異？ とかヒートからくる体調不良を、抑制剤とかそういう薬じゃなくてアルファに和らげてもらいたいっつーこと？」

「そうです」

理解の程度はわからないが、赤葦の簡単な説明で、一応の状況は把握してくれたいらしい。必要以上に驚くことも騒ぐことも、そして引くこともせず、黒尾は事実をただ受け止めた。彼の頭の回転の速さと柔軟さは、MBとしてのプレーにも表れている。見た目の胡散臭

さはどうしても否めないが、面倒見の良さと懐の深さは後輩たちに慕われている様子からも見て取れた。

しばらくの間じっと黙って赤葦の顔を眺めたあと、黒尾は呆れの色を滲ませた長い溜め息を吐いた。

「つまり、まあぶっちゃけて言えばアルファと寝るってことだよな？ おまえが突っ込まれるほうで」

露骨な台詞に顔を顰めなくなったが、この話を持ち出したのは赤葦のほうだ。遠慮のない台詞を吐く黒尾を非難することなどできない。それに言葉をどれだけオブラートに包もうと、下世話な内容には変わらないのだ。

「……そうですね。体質的なものか変異したばかりだからかわからないですけど、俺、薬が効きにくいみたいなんです。強い薬を飲むと副作用で体が動かなくなってる、それはそれで困りますし」

「いや、おまえの言いたいこともわかるけどさ、アイツがこのこと知ったらどうなんの？ 納得するの？」

アイツ、とは当然木兔のことであろう。木兔の無邪気な笑顔が一瞬頭に浮かび、後ろめたさで顔を伏せたくなった。

「知られたらもちろん、チームメイトが馬鹿なことをしているって呆れられると思いますけど……」

「呆れるとかそういうことじゃなくね？ ていうかそもそも、アイツとおまえの関係って『チームメイト』の一言で片づくようなもんか？」

「……先輩後輩、エースとセッター、ですかね」

「赤葦、おまえそれ本気で言ってるのか」

黒尾が咎めるように語気を強める。

先ほどから、黒尾の苛立ちにははっきり伝わってくるのだが、赤葦には黒尾が腹を立てている理由がいまいちよくわからなかった。自分の知り合いを妙な話に巻き込もうとしているのが気に入らないのだろうか。

それはわからないでもないが、赤葦もふざけているわけではない。真剣だし切実だ。

「あ、一八〇越えのゴツい男を抱けるアルファは、なかなかいいんだらうなっことは重々承知しています」

「そういうこと言ってるじゃねえよ……」

微妙に噛み合わない会話を無理矢理終わらせて、その日は黒尾と別れた。

赤葦は周りの男友だちのように早く童貞を捨てたいと思っていたわけではないし、女の子のように初めてのシチュエーションにこだわっていたつもりもない。

でも、セックスは当然好きな人とするものだと思っていたし、そうしたいと思っていた。しかしオメガは、そんな当たり前のことすらもままならないのだ。

次の発情期がきたら見知らぬアルファに抱かれる。

それがどういふことなのか、赤葦にはいまいちピンときていなくて。想像しようとしても、服を脱ぐどころか手に触れられる場面以前で思考にブレーキがかかってしまう。

止まってしまった妄想と差し替えられるように浮かんでくるのはいつも木兔の顔だった。木兔としたあの甘いキスの場面が何度も何度も脳内で再生されるのだ。

そしてどういふわけか、その先も妄想し続けられそうな気がしている。初めてキスした相手だからなのか、バース変異に影響を与えたアルファだからなのかはわからない。

「まあ、一番実現しない相手なんだけどな……」

独りごち、赤葦は脳内の木兔を無理矢理思考の外に追い出した。

発情期が近いのでは、と木兔から言われたのは、インハイ前にあった（赤葦にとつては）比較的重いヒートが終わってから三ヶ月ほどが経った秋口のことだ。

体が完全にオメガに造り変わったからなのか、赤葦自身もこの時発情期が近いことをなんとなく感じていて、特に慌てることもなく黒尾に連絡を入れた。

ファミレスで黒尾に不躰で無茶な相談と頼みをしてからも約三ヶ月が経っている。その間にあった森然高校での夏合宿や週末の練習試合で顔を合わせても、黒尾とはバレエの話や軽い世間話をするぐらいだった。

恐らく数日中に発情期に入りますので、と電話口で伝えた赤葦に対しての黒尾の返事は「はいはい」である。おざなりにもほどがある……とは感じたが、こんな下世話な頼みごとを、なかつたことにされていなくてもいいだけマシだったのかもしれない。

二日後の週末に黒尾の知り合いのアルファと引き合わせてもらうことを約束する。

その日にももちろん部活はあったので、どんな理由で休みをもらおうかと思案していたが、その思案は無駄であったと二日後に思い知った。

約束の日の朝、顧問に部活休みの届けを提出しに行くと、木兔も休みの届けを出していると教えられた。

木兔が赤葦の教室に現れたのは、帰りのHRが終わった直後だ。険しい顔で「黒尾に会いに行く必要はない」と言われ、赤葦の計画が木兔にすべて伝わっていたことを知る。

黒尾が連絡をしたのは、赤葦に引き合わせるための知り合いのアルファなどではなくて、木兔だったのだ。

ふたりして部活を休み、木兔に連れて行かれたのは木兔の家だ。

教室を出る時から、靴を履き替える時も、電車の中でも、木兔の部屋に入るまでずっと、木兔は赤葦の腕を掴んだままだった。木兔の纏う空気があからさまに怒りと苛立ちを帯びていたので、腕を放してくれと言うことも、どこに行くのかと訊ねることもできず、赤葦はただ黙って木兔に従うしかなかった。

木兔の両親は仕事でいつも帰りが遅いらしい。つまり夕方はまだ早いこの時間、木兔の部屋で木兔とふたりきりだということだ。

抑制剤を飲んでいるとは言え、赤葦はすでに発情期に入っている。他のアルファやベータにはそれほど影響がなくても、感受性の鋭い木兔には誘引フェロモンが強く影響するかもしれない。赤葦のほうだって今回のヒートがどの程度の重さなのかわからないのだ。お互いにとって、この状況はあまりいい状況ではないと思われた。

部屋に入ってすぐ掴まれていた腕は放されたが、ふたりとも部屋の真ん中に突っ立ったままで、居心地の悪い空気は濃くなるばかりだ。

「あの……木兔さん」

「なに」

「わかっているとと思うんですけど、俺もう発情期に入ってます。前回みたいに体調が崩れてはいないので、抑制剤はちゃんと効いているんだと思いますが——」

「効いてるよ。今のおまえの匂いに気づくのは俺だけだ」

普段賑やかすぎるぐらいに賑やかな木兔と無言で対面しているのが気まずくて、その気まずさを消そうとできるだけ自然な調子を心掛けて話し始めたら強い口調で遮られた。そしてまた険しい表情のまま黙り込まれてしまう。

「……木兔さんは、なにをそんなに怒っているんですか？」

怒りをさらに煽るだろうことは覚悟の上で正直な疑問を口にする。

自分のバイオリズムを整えるために、赤葦は見ず知らずのアルファに身を委ねようとした。それが軽率に感じられたのかもしれないが、赤葦も必死だったのだ。木兔に面倒を掛けず、今まで通りバレーができて、チームに迷惑を掛けない方法はそれしかなかった。

予想通り木兎から立ちのぼる怒気が強くなつて、信じられないようなものを見る目をされる。

「本気で訊いてんのか、それ」

素直に頷くと、苛立ちと呆れをたっぷりと含んだ長い溜め息を落とされた。

「赤葦がオメガになったのは俺の影響なのに、なんで俺以外のアルファに頼ろうとするのがわかんない。どう考えたって、おまえのヒートを安定させるのに一番効果があるのは俺のフェロモンだろ？」

「それ……どうして……」

木兎に影響されてベースが変異したことを、赤葦は木兎に伝える気はなかったし、それらしいことを言ったこともない。責任を押しつけるようで嫌だったからだ。

しかし木兎には知られていた。

どうして、と問う声が見つともなく震えている。

「この前のヒートがすげー辛そうだったから、俺になんかできることないかと思ってアンダーベースのこと調べたし、昔から診てもらってるベース科の医者にもいろいろ聞いた」
木兎にとって、バレーに関すること以外はたいい「どうでもいいこと」に分類されるのだと思っていた。

それはそれで間違いではないのだろう。セッターの不調は木兔のバレーに大きく影響する。

しかしまさかここまでいろいろ調べられるとは思わなかった。

今さらだが、ベースというデリケートな部分を無遠慮に探られたことに腹を立てればいいのか、自分が木兔にとって「どうでもいい枠」に入っていないかったことを喜べばいいのか、わからない。

「……確かに木兔さんのアルファフェロモンが一番有効かもしれませんが、木兔さんのものでなくてもアルファなら誰のものでも効果はあるんです」

「それがムカつくんだよ。俺がいるのに、俺が一番いいってわかっているのに、俺に頼らないで他のヤツに頼ろうとすんのがムカつく」

子どもが駄々を捏ねるみたいに、木兔は傲慢な台詞を堂々と言い放った。自分が間違っているだなんて微塵も疑っていない顔をして。

「だって木兔さん……、他人のフェロモンのせいで自分がコントロールできなくなるのは嫌だつて言ってたじゃないですか。俺が酷いヒートになったら、俺のフェロモンのせいで、アンタが望まない状態になるかもしれない……」

木兔に疎まれてしまうのが怖くて、それが嫌で、どうすればいいのかを必死に考えたの

に――。

「相手が赤葦ならイヤじゃねえよ」

赤葦の抱えていた恐れや苦悩を、くだらなくて些細なことだとも言うように、いつだつてこの男は、あっさりと簡単に片づけてしまうのだ。

「……なんで」

「なんで、つてのはこっちのセリフ。なんでここまで言つてわかんねえの」

いろいろ考えるくせに肝心なところは鈍くて気づかない、と聞き捨てならないことを付け加えながら、険しい表情を崩し、木兔は今日初めて柔らかい笑顔を見せた。

その笑顔に見惚れて動けないでいる赤葦の前に立って視線を合わせる。木兔の濃厚な氣配に包まれて息がしにくい。瞬きすらもまともにできない。

「俺は赤葦が好きだから。おまえのことしか考えられなくなるのはイヤじゃない」

木兔の金色の瞳には赤葦への甘やかで温かな情が滲んでいる。疑いようのないその愛しい色に、赤葦の胸は激しく震えた。

「自分じゃわかんないかもしれないけど――」

赤葦へとまっすぐに伸びてきた木兔の手の平が、腕、肩、背中、首筋を、ゆっくり辿るように撫でていく。

「俺が近づくと匂いが濃くなるんだよ、おまえ。俺のフェロモンに反応してんの。今もそう。抑制剤飲んでてもはつきりわかる」

自分の匂いは自分ではよくわからない。でも、木兔が触れた部分が熱くなり、そこから全身に熱が伝わっていくのはわかる。木兔の気配や声や匂いに反応して肌が粟立つ。怖気ではなくて興奮のせいだ。もっと木兔を感じたいと体中が騒いでいる。

「赤葦は？ 俺のこと好き？」

木兔の目を見つめたまま頷くことすらできずにいる赤葦の頬を両手で挟み、軽い口づけを一つ落とす。

直後、赤葦の答えは聞かなくてもわかっているとでも言うように、にやりと男くさい笑みを見せた。

「もう俺以外のヤツに触らせようとするな」

吐息が唇に触れる距離できっぱりと言いつけられる。

そんなことを言われなくてももう、木兔以外のアルファの気配を間近で感じることにすら耐えられないような気がした。

ほとんど棒立ちだった体を抱き締められて後ろに押される。よろけて倒れこんだのは木兔のベッドだ。

「木兔さん……なにを……」

するつもりなのか。と、訊ねる声が掠れて震えた。

ベッドの上に転がって木兔に覆い被さられているこの状況で、本当になにをされるのかわからないわけではないが、木兔に気持ちを伝えられてからの流れが速すぎて理解と感情が追いつかないのだ。

「今日おまえが他のアルファとしようとしてたこと」

その件に関しては相当頭にきているらしく、木兔は眉根を寄せて苦々しい声を出した。

「……未遂です」

「当たり前だ」

「おれは……どうすれば……」

「なんもしなくていいよ。ただ俺を見てればいい」

言い合っている間にも木兔の手は淀みなく赤葦の体を撫で、服を剥ぎ取っていく。

「ぼくとさん……」

「男は抱いたことねえけど——、俺は、赤葦がイヤがることも辛いことも絶対にしない」

この宣言は喜ぶべきものなのか……？ 微妙なところだ。

「そのかわり、二度と俺以外の誰かに触らせようなんて思えないようにする。手加減はし

ないから」

「……怖いんですけど」

「大丈夫。でも今日はウチに泊まっていけ」

暗に「帰れないような状態になる」と言われて、不安と期待で背筋が震えた。

手加減はしない——の言葉通り、木兔のやり方は、こういった行為になれていない赤葦にとつて容赦のないものだった。

丁寧と言うよりは執拗と呼べる熱心さで、木兔は赤葦の全身をくまなく愛撫した。

抑制剤を飲んでいるとは言え、発情期真っ只中の敏感な肌に木兔の執拗な愛撫はいささか酷だった。しかし赤葦がどんなに「辛い」「止めて」と泣き言を零しても木兔は決して愛撫の手を止めなかった。哀願する赤葦の姿は木兔の興奮を煽っただけである。

「嫌がることは…しないって……」

「おまえ、イヤがつてねえじゃん」

「あっ……もう…やめ…」

木兔は背中側から腕を前にまわし、赤葦の性器をゆるりと撫でた。何度か射精させられ

たはずのペニスは未だ芯を持って勃ち上がっていて、木兔の反対側の指を食んでいる後孔はぐちぐちと粘質な音をたてて潤みを証明している。

抑制剤が効いていないわけではない。木兔の強いアルファフェロモンに反応して赤葦の体は激しく欲情し濡れているのだ。

「ぼ……くとき……ん、……もう……お願い……」

これももう何度目のお願いかわからなかった。与えられる快感が大きすぎて辛い、早く挿入して終わらせて欲しいと切望してのことだ。

木兔が長い息を吐いて赤葦の後ろから指を引き抜く。

これでラクになれる……とホッとしたのも束の間。

「ん。俺もそろそろ我慢できねえ」

そう呟くと、四ツ這いの体勢だった赤葦の腰だけを高く上げさせ、背後から、木兔の指を失って名残惜しげにヒクつく口に硬く膨れた昂ぶりを宛がった。屹先がぐつと中に押し込まれると、赤葦のソコはさしたる抵抗もせず木兔のペニスを奥へ奥へと誘うように飲み込んでいく。

「あッ……ああ……っ！」

「すげえな……」

尻に木兔の下生えを感じたと同時に、木兔が感嘆の声を漏らす。その声に応えるように、赤葦の内壁は嬉しげにぐにぐにと木兔の雄芯に絡みついて扱いた。

「は…っ…あ…あ…あ…あ…あ…」

始めはゆっくりだった挿挿が、次第に激しくなつてベッドを軋ませる。

生殖器の先端で最奥を激しく突き上げられて背がしなる。張り出た雁で熟れた粘膜を擦られ、敏感なしこりを穿たれて瞼の裏に火花が散った。

セックスとは、挿入して射精してそれで終わりではないのか。この獣のような交わりが、アルファとオメガにとつての普通のセックスなのか、今まで誰とも肌を合わせたことのない赤葦にはわからなかった。

以前木兔が言っていたような、理性を飛ばした状態でのセックスなど恐ろしすぎる。

…と言つても今の赤葦の思考はほとんど停止していて、濃密な快感に喘ぐだけの状態だ。理性など飛んでいた。木兔にはまだ、善がり悶える赤葦を見て楽しむ余裕はあったようだが。

結局、喘ぎすぎて声も嘎れ、ただ揺さぶられるままの状態になつて、性懲りもなく何度目かもわからない射精をしたところで赤葦は意識を手放した。

どれぐらい意識を飛ばしていたのか……、目が覚めた時真つ先に感じたのは後ろにある異物感だった。

横臥する赤葦の体を、木兎が背中から抱き締めている。

そして自分の中に木兎の昂りがまだ挿れられたままだったことに驚いてソコを締めつけてしまい、中の木兎の形や大きさをまざまざと感じる羽目になって悶えた。

「あ、赤葦起きた？」

耳元で木兎の呑気な声がする。

「な……ん……なか……」

なぜ挿入したままの状態なのか、と訊きたかったが、まともに声が出ない。

「動きたかったんだけどさ、赤葦、飛んじやったから」

だから動かずに待っていたのだ、と明らかに明かされる。

……いや、そういうことじゃなくて。

「でも、意識がない時でもすげーきもちよかった。おまえの中、キツくて、あったかくて」再び緩く腰を使われ、赤葦の中もそれに応えるように潤みを増し、嬉しげにうねりだす。

「は……………あ……………」

「ここ弄るとすげー締まるし」

「あッ…ん……………や…っ！」

胸の尖りをくにくにと摘まれ、体がびくと跳ねた。後ろはまた木兔のペニスをぎゅつと強く締めつけ、腰が浅ましく揺れている。

木兔には及ばずとも、そこそこにあったスタミナとオメガの生殖本能のせいで、木兔の化け物じみた欲望に応えられてはいたが、これでは体が保たない、死ぬ、と生存本能のほう悲鳴を上げた。

「……………くと…さん、……………も……………むり……………しぬ……………」

どうにか声を絞り出して懇願すると、さすがに木兔も赤葦の限界を悟ったらしく、小さく苦笑いを零した。

「わかった。じゃあ、あと少しだけ付き合って」

木兔の「あと少し」がどれほど当てにならないか、毎日の自主練で思い知っている。背後の木兔を振り返って絶望感いっぱい目を向ければ、「まじで」とティッシュ並みの軽い一言が返ってきた。

「ほんと…に、すこし…?」

「ん。ほんと。すこしだけ」

向かい合う体勢に変わって、緩やかな抽挿が繰り返される。大きく開いた両脚を抱えられ、体は折り曲げられて、不自然な格好であちこち苦しい。でも、欲に浮かされて気持ちよさそうに腰を振る木兔を見てみると、赤葦の体内が甘く温かいもので満たされるのを感じる。とても気持ちよかった。

しかし、気持ちよさに浸る赤葦を目にした木兔の顔が、とても困ったようなものに変わる。

「あかあし…、そんな顔しないで。終われなくなっちゃう」

「……え、どん…な？」

「きもちいいって顔。あと、俺のことがすきーって顔」

「きもち…いいし、すき…ですよ？」

ふわふわした心地のまま素直に答えたら、赤葦の中の木兔が一層大きく膨らんだ。

「なん…で」

「今のは絶対おまえが悪い」

理不尽極まりない（…と思う）ことを言いながら、木兔が抽挿の速度をはやめた。穏や

かだつた快感の波がまた大波のようになって赤葦を襲う。最奥の敏感な部分を木兔の猛りで激しく何度も突かれ、それと同時に意思とは関係なくまた勃ち上がっていた性器を擦り上げられて熱が弾ける。

びくびくと痙攣する自分の中で、木兔の熱が広がるのを薄いゴム越しに感じながら、赤葦は再び意識を手放した。

二度目に目を覚ました時には、自分のそばに馴染んだ温もりがなくて、ホツとしたような寂しいような複雑な気分で赤葦は辺りを見回した。

窓の外はすでに暗く、部屋の中も薄暗い。汗やらなにやらで塗れていたはずの自分の体が綺麗にされていて、これまたいろいろな物でぐしゃぐしゃだったシーツがベッドから剥がされている。すべて処理してくれたのは間違いない木兔だろうが、あれだけの激しい運動をした後でも普通に動き回れる体力に感心し、同時に空恐ろしくなった。

——本能とスタミナ全開でヤラれたら自分は確実に死ぬ。

先ほどまで行われていたアレコレを思い出し、羞恥と恐怖で顔を赤らめたり青褪めさせ

たりしていると、木兔が部屋に戻ってきた。

「赤葦、飯食える？ 母ちゃん帰ってきて飯作ってくれたんだけど」

「……いえ、お気持ちだけ戴いておきます」

木兔はコンドームをつけていたが、腹の中を強く刺激されたせいか食欲がなかった。

「声、カッスカスだなー」

「……誰のせいですか」

「俺だけど」

ベッドの縁に腰掛けて、機嫌よさげに笑いながら赤葦の髪を撫でていた木兔の手を。ぺちりと叩く。

「木兔さん、俺はどんな理由で今日、木兔さんのお宅に泊まることになってるんですか？」

気になっていたことを訊ねると、木兔は赤葦からスツと目を逸らした。……嫌な予感しかしない。

「疲れて寝ちゃったから、って言った。んで、赤葦の家にもそうやって電話しといた」

「……………」

気を利かせて赤葦の家にまで連絡しておいてくれたのはいい。……が、部活の先輩の家で「疲れて」寝てしまう後輩（または息子）ってどうなんだ。そもそもなにでそんなに

「疲れ」なきやならないんだ。

明日、強烈なアルファフェロモンを身に纏った息子を見た母親はどんな反応をするだろうか。

木兔の母親はアルファだ。この嗅覚の鋭い木兔の素なのだから、抑制剤を飲んでいても、赤葦のヒートに気づくかもしれない。アルファと発情期中のオメガがずっと同じ部屋にいて、なにもないと思うほうがおかしい。

ダメだ……。いろいろ考えたら眩暈がしてきた……。

「俺、自分の母親とも木兔さんのお母さんとも顔が合わせづらいんですが……」

「ああ……。まあ、大丈夫じゃね？」

「ぜんぜん大丈夫じゃないです」

「でも自分の運命のツガイが他のヤツに手をつけられそうだったんだから、仕方ねえじゃん？」

誰かに自分のオモチヤをとられそうだったから、ぐらいの軽さで、突然木兔が爆弾を落としました。

「誰が……運命のツガイなんスか……」

「おまえ」

「すみません、ちょっと意味が……」

「え、ツガイの意味？」

「違います」

ツガイとは、アルファとオメガの間のみに存在する、普通の恋人関係や夫婦関係よりも強い結びつきの関係、もしくは相手のことである。ツガイの関係を結ぶには、アルファがオメガのうなじを噛まなければいけないとか、一度結んだツガイ関係はオメガ側から解消できないだとか、特別な方法やルールみたいなのがあるとかあって、それぐらいのことは今時、小学生でも知っている。

そして「運命のツガイ」とは、簡単に言ってしまうとツガイに輪を掛けて強い結びつきで、見つけにくい相手のことである。

木兎は赤葦のバース変異に影響を与えたほどの男だ。もともと好ましく思っていたし特別ではあったが、ぶっちゃけて言ってしまうと、好きだとはつきり気づいたのはほんの数時間前なのだ。

ツガイだとか運命のツガイだとか言われても、正直、最近までバースすら定まっていなかった赤葦にはピンときていない。

困惑気味の赤葦に、木兎はここぞとばかりに畳み掛ける。

「アンダーベースって、数万人に一人ってぐらい少ないベースなんだろう？　で、変異するアンダーベースはそれよりもっと少ない。その数万分の一とか数百万分の一の低い確率でしか起こらないことが、俺と会って赤葦に起きたんだろ？　それ、普通のツガイを見つけるとより低い確率じゃん。運命じゃなくてなんなの？」

説得力がありすぎる台詞に赤葦は目を瞠った。

木兎は漢字が苦手だ。数学はよく赤点をとるし、会話には謎の擬音が多い。しかし本能と鋭い直感で生きている。

木兎光太郎は何事も「間違えない」のだ。

この木兎光太郎という上等なアルファに「運命のツガイ」として見做されていることが、単純に嬉しい。

いやいや、待て待て。なんか上手くノセられている気がする。

浮かれる赤葦と慎重な赤葦が脳内で闘ぎ合っていて煩い。

結論はすぐに出そうもない。

「それについては……ちよつと保留ってことで」

若干投げ遣りぎみに、そして無理矢理、赤葦は瞼を閉じた。

今日は朝から、赤葦の人生を左右するような出来事がいろいろとありすぎたのだ。頭も

体も疲れきっている。

とにかく今はもう、なにも考えずにゆっくり寝かせて欲しい……。

ふて寝している赤葦の髪を撫でながら木兎が面白そうに言う。

「困ってるけど、イヤがってはいない、だな。合ってる？」

匂いでそんなことまでわかるのか。

「……………合ってます」

木兎の嗅覚はとても誤魔化せそうな気がしないので、目を閉じたまま正直な返事をした。髪を撫でていた木兎の手が赤葦のうなじまで下りてくる。

するりと撫で上げられて背筋が震え、全身の肌が粟立った。

その時赤葦の胸にじわりと湧き上がったのは、紛れもなく、期待だった。

「じゃあ、とりあえず予約しておくか」

木兎は赤葦の白いうなじに強く吸いつき、「予約済」の赤い印をつけた。